

「日々の理科」(第 2534 号) 2021, -6, 21

「アゲハの前蛹 (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

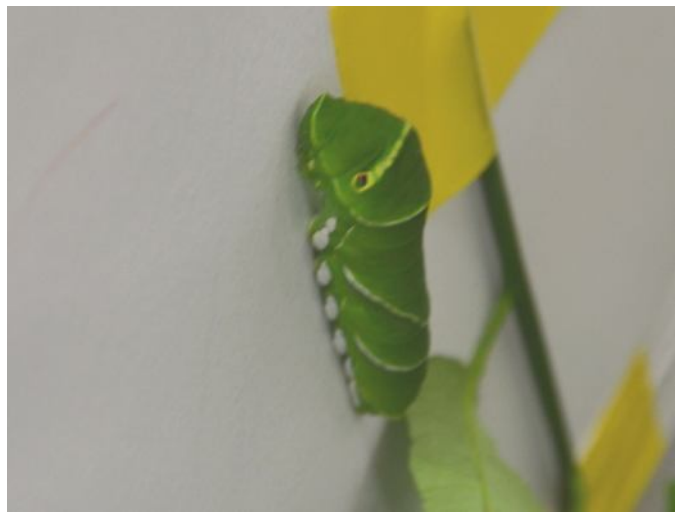
教室でアゲハの幼虫を飼育していると、さまざまな「事件」が発生する。一番多いのは、夜間や早朝に羽化した成虫が、教室の壁にとまっていて驚いたり、時には授業中に教室をヒラヒラ飛んだりすることだ。教科書のようにちゃんと網のある入れ物で飼えば良いのだが、私は毎年「オープン」で飼育している。そのほうが昆虫と子どもの距離が、より近いからだ。



アゲハの場合、前蛹の状態にいるのは24時間程度の短い時間である。翌朝にはサナギになっていた。



ある朝のこと。「先生、先生、幼虫っぽい、サナギっぽいのが、電気の線らへんにとまっています！」案内されて隣の教室に見に行くと、確かにその通りの状況で、延長コードの縁に幼虫っぽいサナギがいた。



アゲハの終齢幼虫は、前蛹になる前に葉を食べるのを止めて、サナギになるのに適した場所を探す。虫かごの場合、葉や茎からは離れて、壁を登ることが多い。



これは「前蛹」(ぜんよう)という状態の、「幼虫最後の姿」である。前日に逃亡して、行方不明になっていた幼虫が前蛹化したにちがいない。



この幼虫は虫かごの壁を登り、翌朝に蓋の裏側で前蛹化していた。完全に逆さまになって静止している。よく見ると、周囲には糸がたくさん見える。私はこの珍しい幼虫を、学年の子ども全員に見せることにした。